

3Rイニシアティブ誕生の背景

国連大学サステナビリティ高等研究所 所長

竹本 和彦

Takemoto Kazuhiko

2014年より現職。国連大学に奉職する前は、環境省において気候変動、生物多様性、3R・資源循環といった環境問題に関する国家戦略など、持続可能な社会実現に向けた政策立案に従事。OECD環境政策委員会副議長（2004 - 2007年）、国際応用システム分析研究所（IIASA）理事（2011年より）などを歴任。現在東京大学特任教授（IFI）を兼務。外務省「SDGs推進円卓会議」メンバー、内閣府「自治体SDGs推進評価・調査検討会」委員及び「SDGsステークホルダーズ・ミーティング」構成員。工学博士（東京大学）。



前回のコラムでは、「社会は変革する」と題し、環境問題を巡る社会がリオ・サミット（1992年）を契機に大きく変革してきたことを記した。今回は「3Rイニシアティブ」がどのようにして国際社会に登場していったのかについて私自身の経験から振り返ってみたい。

話は2004年の「G8シーアイランド・サミット」（米国）に遡る。前年のG8エビアン・サミットが終了して間もない頃から小泉首相（当時）は、次のG8サミットに向けては「日本が環境分野で主導的な役割を果たすべき」との姿勢で、事務当局に指示が出されていた。しかしながら環境分野では、これまで気候変動がG8サミットの定番となっていたが、ブッシュ大統領（当時）は就任早々京都議定書からの離脱を表明していたことから、本人が議長を務めるサミットでは、さすがに気候変動は議題にのせられないし、またその関連でいかなる環境問題も議題にはならないであろうというのが各国事務レベル代表者間での相場観であった。外務省高官が官邸に足を運ぶたびに、そんな雰囲気を報告したが、小泉首相はこれまでのスタンスを崩さず、頑として譲らなかつた。

そうした背景もあって、外務省から相談を受けた私たちは連日検討を重ねた。その中で浮上して

きたのが、アジア地域内で広がりつつあったプリンターのインクカートリッジのリサイクルであった。これを3Rという考え方に再整理して官邸に持ち込んだところ、即了解が得られた。その後すぐに外務省の担当審議官がホワイトハウスを訪問し米国の了解を取り付け、さらに欧州各国からの全面的支持も得られた。こうして「3Rイニシアティブ」は、G8サミットの正式議題案として、一気に国際舞台の真只中に躍り出ることになった。

国内的には、既に循環型社会を目指し、基本法や基本計画の枠組みの下で諸施策が実施されており、今回提案も国内のコンセンサスを速やかに得ることができたのも大きな要因であった。

当時我が国における廃棄物分野の国際的活動といえば、主として「バーゼル条約」の履行に限られていたが、「3Rイニシアティブ」に乗り出したからは、「アジア太平洋3Rフォーラム」を主導し、近年はヨーロッパ諸国とも連携して「世界循環経済フォーラム」を推進するに至っている。

時折しも本年日本はG20議長国としての役割を果たす機会が巡ってきた。その堂々とした存在感を名実ともに発揮していくことが期待されている。